



Title	ハラハラトリオの性役割意識
Author(s)	木村, 由利子
Citation	IDUN. 1992, 10, p. 61-80
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/95825
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ハラハラトリオの性役割意識

木村 由利子

1. はじめに

過去にはあまり興味がない。40年あまり生きていれば、むしろ来し方行く末に思いをはせることもないではないが、60年代以前は霧に包まれている。そして行く末のほうは、21世紀が果たしてあるものやわからぬ以上、ブラックホールに沈ませておく。

したがって興味は、現在に向くことになる。振り返っても、せいぜい自分の十代にあたる時代までだ。それならば、文献の上のことも、血肉を得てよみがえる。匂いが嗅げ、音が聞こえ、情景が浮かぶ。共有する時代を知るのは、いつもスリルに満ちた体験だ。遠くはなれた土地の出来事であれば、殊に。

そんな「現在」を読むのに最適なのが、ミステリーやジュニア小説などの娯楽作品だ。読者に読んでもらうことを第一義に考えたこれらの作品は、ほぼリアルタイムで、作者の生きている国や地域を、おそらくは少しの皮肉をこめて、素直に描き出す。ブンガクのように、自己陶醉でぬりこめた不条理の迷路に読者をひきずりこんで混乱させることはない。そこには「いるいる」人間、「あるある」状況が、手の届くような姿で浮かんでいるのだ。

現在に敏感なそういった作家たちが、ひと昔ほど前からさかんに使いはじめた単語がある。男性優越主義者という言葉だ。デンマーク語では、mandschauvinist という。もともとはフェミニズム用語で、デンマークで女性運動が盛んになった50～60年代には、関係者の間で使われていたのだろう。ただし流行語と化したこの言葉には、

冷やかし、からかいなど、いささか不真面目で卑俗な雰囲気はただよう。日本でセクハラなる言葉が、流行語になった時と同じだ。けれども卑俗を人間くささと言いかえるならば、流行語になった *mandschauvinist* には、他に暖かさ、もしかしたら愛情さえただよってくるのかもしれない。

さて、デンマークには、ミステリーもジュニア小説も、はてはファンタジーや新聞のコラムまでこなす人気作家がいる。1950年生まれのビャーネ・ロイター (Bjarne Reuter) だ。1975年のデビュー以来、現在までに50冊余りという、とてもデンマーク人と思えない驚異的なスピードで、作品を発表している。映像化された作品も数多く、「子供たちの城」で脚本を共同執筆したビレ・アウグスト監督とは、あの「ベレ」でも一緒に仕事をしているほどだ。この、いたって現在に敏感なはずのロイターの性役割意識は、いったいどんなものだろうか。つまり、

はたしてロイターは *mandschauvinist* なのか？

を、作品を通じて考えてみたいと思う。

ただし、筆者はフェミニストではない、つもりであることを、あらかじめお断りしておきたい。

作品としては、通称バートラム・ブックス (邦題「ハラハラトリオシリーズ」, ポプラ社刊) として知られるシリーズ物6冊を取り上げた。ロイターのデビュー作でもある第一作 *Kidnapning* は1975年、シリーズ最新作 *Den skæggede dame* は1989年の作品であり、14年という時が過ぎるあいだに、作者ロイターの意識がどう変わっていったかもさぐれるはずだ。

2. *KIDNAPNING*

バートラム・ブックスの主人公は、コペンハーゲン郊外に暮らす一家である。姓は明らかにされていない。刑務所にいた過去を持つ

父親，家計を懸命に支える母親の間に，子供が4人いる．長男のオスカー，長女のビニー，次男のアナス，三男のバートラム．この6人が，二間きりの狭いアパートに詰め込まれている．そればかりか父親の弟で，シャバと刑務所を往復しているチンピラ悪党のゲオウが，時々転がり込んでくる．一家が住む一帯は，スラムといってもいい低所得層地域．なかなかすさまじい環境だ．これが日本の児童文学であれば，貧しさに負けず目を星のように輝かせて未来に向かって明るく生きる兄弟の物語になるところだが，この家の少なくとも男きょうだいは，金がからむとあっさり犯罪にころんでしまう．ただ手口が杜撰なため，成功に至らず，トラブルに巻き込まれてドタバタ騒ぎを引き起こす，というのがシリーズのパターンなのだ．

第一作 *Kidnapning* から見ていこう．父親は慢性的失業の最中で，母親が学校の掃除婦をして家計を支えている (p. 9)．当然経済的には厳しく，母親は子供の洋服につぎをあてて，少しでも長くもたせようとする (p. 9)．気丈な母親は家族の前で涙を見せないが，夜中にトイレでひそかに泣いているのを，娘は知っている (p. 11)．夫は家にいても，主夫役をつとめる気はないようで，母親が夕食のジャガイモむきも引き受ける (p. 11)．非熟練職業と家事の全面負担とくれば，絵にかいたような，一昔前の母親像だ．しかも女らしく体も弱いらしい彼女は，病に倒れ，入院を余儀なくされる．この，一種松竹新喜劇風，悪く言えばステレオタイプの設定は，ロイターの得意とするところで，ブスター少年が主人公のもう一つの人気シリーズでも繰り返される．実に保守的な性役割意識だ．

しかし妻が倒れると，一家の父親もさすがに動き始める．娘のビニーと食事を作り，オスカーとアナスが母親の仕事を引き受けるのだ (p. 15)．しかし後になると炊事も (p. 15, p. 34)，洗濯も (p. 19)，ビニーにまかされ，父親は毎日病院に通う (p. 15)．語り手の弟アナスの見るところでは，ビニーは主婦役をまかされて

から、ぐんと落ち着き、たのもしく成長したようだ (p. 25)。ただ彼女は、きょうだいの中で不思議なほど存在感がない。女だというだけで、そんなに孤立するものだろうか。一人だけ閉じこもり、人形遊びをする (p. 13)。一方、男きょうだいは、そろってビー玉遊びに興じるのだ (p. 22)。

この後物語は、悪党のゲオウおじが登場して、3人兄弟を誘拐事件にひきずりこむことで、舞台を家から富豪の邸宅に移す。物語としての中心部であるここには、しかし性役割に関する記述はほとんどない。逃亡のために女装を示唆されたオスカーが、

Aldrig i livet! (p. 83) 〈絶対にやだ!〉

と拒絶するところぐらいで、そのくせメーキャップをはじめとノリはじめ、女性用のトイレにかけこむしまつだ (p. 85)。

さんざん苦労を重ねた結果、もうけはゼロ、薄情なおじは逃走、くたびれはてた兄弟がなんとか家に帰り着くと、ビニーが台所から出てきて (p. 118, どうやら台所が彼女の定位置になったようだ)、母親の退院を告げる。平和な日常がもどってきたわけだ。

3. *RENT GULD I POSEN*

次作 *Rent guld i posen* の出版は、処女作と同じく1975年。夏休みの物語だ。前作で入院した母親は、今度は病後療養のため、サナトリウムに入っている。見舞いにいくのは父親と娘の役目らしく (p. 6)、3人兄弟は話を聞くだけだ。父親は、ようやく家具工場の運転手の職を見つけ、長男のオスカーも青果店でバイトをしている。経済状況はやや改善されたようだ。長女のビニーは家事に専念させられている。だが平和な日々は長続きせず、青果店とトラブった3兄弟は、コペンハーゲンを出てほとぼりをさます必要に迫られる。幸いユトランドのド田舎で母方の親戚が農業を営んでいるので、そこに行こうと話が決まる。ビニーは以前親戚宅に世話になったこと

があり、とても役に立ったというので、受け入れはすんなりと決まる。本来なら功労者のビニーも同行してしかるべきである。だが、父親は次のような意見だった。

Han dårligt kunne undvære Winni, og at det jo var skrupravende forkert, at det var hende, der måtte hænge i og straffes, fordi hun tilfældigvis var pige, men han kunne dårligt undvære hende. (p. 16)

〈父ちゃんは、ビニーがいてくれないとにっちもさっちもいかない。たまたまビニーが女というだけで家にしぼりつけられる立場になるなんて、たしかにすごくまちがったことだけれど、それでも、いてくれないとどうにもならないんだって。〉

女の子だからというだけで、家にしぼりつけられるべきではないのは、建前ではわかっているのだ。だが父親は、自立していず、娘の手助けなしでは生活を営めない。兄弟たちもつれない。一応神妙な顔でうなずいてから、弁解がましくこう答える。

Oscar sagde, at han da sagtens kunne se det urimelige, men at det vel var kvindens lod. (p. 16)

〈オスカーはいった。ほんと、不公平だと思うよ。けど、女のさだめだもんな、ってさ。〉

だいたいオスカーは、すぐに腕力を誇示したがるマッチョ傾向があり、頭もかなり保守的なようだ。

ユトランドにたどりついた3兄弟だが、すぐに親戚夫婦と衝突をはじめ。ただ一人、分別を備えたアナスがなだめると、

Tøsedreng. (p. 47, 素直に訳せば〈オトコオンナ〉か)

と、末っ子に悪罵をあびせられる。この言葉は、兄弟の間ではインバクトのある悪口らしく、第1巻(p. 94)でも、侮蔑的に使われる。mandschauvinist 兄弟としては、我慢できない言葉なのだろう。親戚の家でマッチョの長男は炊事の手伝いを拒否し(p. 52),

オトコオンナのアナスはおとなしく皿洗いを手伝う (p. 52).

このあと事件に巻き込まれた兄弟は、またもやひたすら逃げ回る運命になる。そして逃亡生活の中、再び女装する。せっばつまって女物の水着をつけた兄貴二人は恥ずかしがるが、末っ子のバートラムは黄色のビキニにどきげんで、

Anders, kan du ikke lige binde min brystholder op, den snærrer. (p. 125)

〈アナス、ブラジャーはずしてくんない。すぐきついの。〉
と悪ノリする。

こことは直接関係ない部分を大幅に省略すると、無事に事件を解決した兄弟は、コペンハーゲンに戻ってくる。青果店の件はおとがめなしにすみ、10日後には母親も家に帰ってくるという嬉しいニュースを、花を飾るビニー (p. 143) から聞かされる。ビニーはそのあとすぐに台所に引っ込み、女のさだめにいそしむが、アナスはジャガイモの皮むきを手伝う (p. 143)。オスカーは何もしないで、ビニーはよくやっているよとほめるだけだが、これでましな食事ができると心なく喜ぶバートラムよりは、ましな態度かもしれない (p. 144)。父親も何もしない。居間に座り込んで、食事はできたか、とビニーに声をかけるだけだ (p. 144)。そして食事の後片付けをするのも、アナスとバートラムで、父親とオスカーは動かない (p. 144)。

こうして第1巻と第2巻はともに、かなり男性優位風に終わる。

4. RIDDER AF SKRALDESPANDE

この傾向が微妙に変化したのが、第3巻 *Ridder af skraldespanden* (1976) である。これには1975年の国際女性年が関係しているに違いない。事実作品冒頭で、なべつかみを編んでいるビニーに、来年は国際女性年なのを知らないのかと、アナスが声をかける場面がある。それに対してビニーはこう答える。

Jo, de er til far. (p. 7)

〈わかってる．これ，父ちゃんにあげるの．〉

贈る相手は父親なのだ．文句も言わずに家事を引き受けていたビニーと，残りの家族に，変化が忍び寄ってきたようだ．今回母親は元気で，食事作りや子供の世話にいそしんでいる (p. 8, p. 14)．父親と一緒に学校の懇談会に出席もする (p. 13)．父親は母親の自転車を修理したり (p. 13)，テーブルセッティングを引き受けたりと (p. 14)，こちらも良き父ふりを発揮している．きょうだいの仲も様変わりしてきた．ビニーと少なくともアナスは，今はとても仲良しで，近頃になってはじめて気持ちが分かり始めた気がする，とアナスは述懐している (p. 15)．経済状況は好転していないようで，母親は掃除婦よりからだの負担が少ない家政婦になって働いている (p. 25)．父親の職業についての言及はないが，おそらく前の仕事を続けているのだろう．それもひたむきに．父親の姿を目にするだけで勇気がわくと，アナスが述べているからだ (p. 26)．

事件はクリスマス休暇のただ中に起きる．子供たちは金を出しあって，仲良く両親へのプレゼントを買いにいく．パートラムは母親に連れられて買い物にでかけ，留守番のアナスはソース作りにはげみ，父親はジャガイモの皮むきをする (p. 31)．みんなが助け合う，理想的な家族像である．ところがそこにスウェーデンから逃げてきたゲオウおじが現れ，とたんに犯罪のにおいが漂い始める．

セールスマンをしていたおじは，重要書類を手に入れたので，産業スパイに売りつけてひと山当てようと考えたのだ．おじは手下がわりに使えそうな３兄弟を誘いだす．その間両親とビニーは，ツリーの飾りつけに忙しい．オスカーにかなりの影響を与えているらしいこのおじは，女を対等に扱うことを知らず，きれいだとほめればいいと思っている (p. 34)．オスカーがだれよりも保守的なのは，無理もない．ビニーを仲間に入れる気はハナからないようだ．

もっともかしいビニーを、内心恐れているのかもしれないが、

例のごとく分別アナスが犯罪加担をためらうと、オスカーも例のごとくアナスを *tøsedreng* とののしる。第2巻までなら一人でくよくよ悩むアナスだが、今回はビニーに相談を持ちかける (p. 54)。腕力に物を言わせるオスカーとは対照的に、読書家のビニーは口で相手を負かすタイプだ。ビニーははっきりしないアナスを責め、まだ未来のあるバートラムだけは巻き込むなと忠告する。今度こそと決心し、おとなしく父親とともに皿洗いにせいを出して (p. 57)、カタギでいようとするアナスだが、結局は巻き込まれていくことも、バートラムが事件に積極的に加わってしまうところも、いつものパターンだ。母親が異常を察して、阻止しようとする場面がはじめて出現し、女性軍の力の台頭を感じさせるが (p. 79)、それもここまで。あとは前2冊と同様、もうけのない大騒ぎが続く。そしてまたもやおじは、子供たちを見捨てて逃げてしまう。戦いすんで、ぼろぼろになって戻ってきた息子たちを、両親は真相を知ってか知らずか、暖かく迎える。そして今までまったくそりが合わないと思われていたオスカーとビニーの心が、近づきあったことを暗示して、物語は終わる。

第3巻で、急に家族の絆がクローズアップされたわけだ。そしてこれまで刺身のツマ程度の存在でしかなかったビニーと母親が、急に大きくなり始める。そしてこの傾向は、第4巻でさらに強くなるのである。

5. *TRE ENGLE OG FEM LØVER*

第4巻 *Tre engle og fem løver* の出版は1977年。前作まではバートラム・ブックスしか作品のなかったロイターだが、第3巻と第4巻の間に、初めてシリーズ外の作品を、しかも7冊も発表している。恐ろしいばかりのハイペースだ。そのせいだろうか。

メッセージが入り込んで、ドタバタに冷水をかける傾向のあった前作までとちがい、第4巻は、いかにも手慣れた、娯楽性の強いものになっている。

第2巻から1年たった夏休み。父親が美術館の守衛という職を得て、家族は生活のリズムをつかみ、しごくまともに暮らしている。ビニーとアナスが、仲良く大掃除に精を出し (p. 7)、リラックスした母親が新聞を読んでいるという平和な光景から、物語は始まる。きょうだいの中でもまともな二人が家にいるのを確かめた母親は、夏休みに客をよんだから、トラブルが起きないように気を付けてほしいと、二人にたのむ。招かれたのは、第2巻に登場したユトランドの親戚夫婦の妻のほう、ギーダおばだ。おばさんは気難しい夫のために苦労しているのだから、たまには息抜きをさせてあげたいのだと、母親はいう。おばといい、母親といい、夫に献身的につくすところは、いまだき珍しい耐える女といえそうだ。思いもかけぬニュースに二人が目をまるくしているところに、残りの兄弟、バートラムとオスカーが帰ってくる。もちろん彼等は大不満だ。家族が騒いでいるところに戻ってきた父親が、さらに大きな爆弾を落とす。3ヶ月間オツトメを果たしてシャバにもどったゲオウおじが、しばらく居候するというのだ。

気弱に登場したおじに、母親は、トラブルの原因になるなと釘をさす。まったく、第4巻の母親はめっぼう強い。家族の主導権を握っているのが明らかなのだ。病弱で子供たちの行動もつかみきれないように見えた彼女は、いったいどこにいったのだろう。彼女に一喝されたおじは、みじめにちぢこまるしかなかった。

当然ながら出迎え一行とギーダおばはすれちがい、あわれなおばは、会いたくもなかったゲオウおじと鉢合わせする羽目になる。ショックに気絶せんばかりのおばをビニーが辛うじてなだめ、コーヒーをいれてもてなし、お茶菓子がわりのパンを買いに行く (p. 19)。

出迎え一行が戻るまで、ビニーが主導権を握っているのだ。あのおとなしかったビニーも、どこにいったのだろう。何しろ彼女は、オスカーのライバルとのけんかに巻き込まれたとき、その少年に一発食らわせた上、

Og skrub så hjem med dig, Benny. Vi har ikke nødig
at skrabe bunden.

〈家へさっさと帰んな、ベニー。あんたのきげんをとるほど、
おちぶれちゃいないよ。〉

と、啖呵まできっている (p. 54)。知性が売り物のビニーだが、やらねばならぬ時は、やるのだ。オスカーが学校の図書室でけんか騒ぎを起こしたときも、司書助手をクビになるのも覚悟で、オスカーに加勢している (p. 87)。第3巻で培われたオスカーとのきょうだい愛が、ますます強まったようなのだ。もっともそこには、おしゃれ競争に加われない、女の子っぽいうっふんも一因としてあるのかもしれない (p. 88)。

事件はその翌日に起こった。父親の職場をおじと共におとずれた子供たちの目の前で、強盗団が絵画を強奪し、ビニーを人質にとって逃亡したのだ。しかも始末の悪いことに、混乱の中で絵が入れ替わり、強盗団が手にいれたのは、バートラムが美術館に掛けてもらおうと持ってきた、彼の作品だった。強盗団は、ビニーと絵を交換しろと、脅迫電話をかけてきた。素直に交換すれば、物語は終わってしまうが、もちろんまぬけな悪党ゲオウおじが、黙って見ているわけではない。ビニーを取り戻して、絵もいただこうと、こそくな手段を弄するために、話はもつれにもつれていく。

これまでの作品では、事件が起こると同時にビニーと母親は姿を消し、最後になって現れるのがパターンだった。だが今回は、さらわれた当事者がビニーであり、それを救おうと、母親も積極的に事件に関わることになる。

舞台が家から動かないため、家事の描写部分も全巻にわたっている。有能なビニーを欠いた家族は、平等に家事を担当する。オスカーとアナスが皿を洗い (p. 37)、両親が朝食を用意し (p. 51)、ゲオウおじは紅茶をいれて、パンまで焼いてみせる (p. 52)。そこまでするのなら、これまでもがんばってほしかった。もっともこれは、悪事をたくらんでいるのをごまかす意味もあったが。

さて、つぎつぎにとんまな救出作戦を展開する、おじと3兄弟を尻目に、ビニーは泰然と人質生活を楽しんでいる。彼女にはおじの作戦が成功するわけがないとわかっているのだ。沖合に停泊する船上で繰り広げられるドタバタにも彼女は加わず、弟たちに示唆をしたり、知らん顔で本を読みふけったりしている (p. 65-68)。犯人たちも完全になめられてしまったのだ。

両親の方は、少しもこりないゲオウたちにいささか疲れ気味で、叱る声にも勢いが無い。真相をギーダおばに隠す努力だけでも、大変なのだ。台所の窓からうつろな目で外を見ている母親の姿は、以前のイメージを思い起こさせる (p. 73)。父親は気をつかい、コーヒーをいれる (p. 91)。

さて、業を煮やした強盗団は、最後通牒をつきつける。ビニーと絵を、美術館の前で交換しようと迫ったのだ。ここは是非とも両親が出向きたいところだったが、当日の夜はチボリにギーダおばをつれていく話が、すでに決まっていた。今さらおばに打ち明けるわけにもいかず、父親は不安を抱きながら、ゲオウと子供たちに犯人との交渉役を託すことになる。落ち着かない心を抑えながら、家族はチボリ行きの用意をする。おばが掃除機をかけ、両親とオスカーが食事を作り、おじとアナスがテーブルの支度をする (p. 104)。以前とうってかわって、見事な家事分担だ。ただし洗濯は女の役目らしく (p. 110)、母親とおばの手に委ねられる。チボリに行く前に風呂に入ってこいといわれた3兄弟だが、オスカーがバートラムの、

ピンクの象さん模様のタオルをからかったので (p. 112), 一瞬険悪な空気が漂う。オスカーの頭の固さはまだ直っていないようだ。物語の前半部分でも,

Magasin holder nemlig en særlig snorkeluge for raske drenge og søde piger. (p. 58, 下線筆者)

〈マガシンデパートじゃ、元気なぼうやとかわゆいおじょうちゃんのために、特別シュノーケル週間を催してるのさ。〉

と、保守的な形容詞を使い分けている。

両親の計画では、末っ子のバートラムは絵の交換場所には出向かないはずだった。だが、危ないことの好きなバートラムが、うんというわけがない。両親の機嫌をとるために、自分からジャガイモむきは手伝う、灰皿の掃除はする、おばの毛糸巻きを手伝う、とこまめにゴマをする (p. 118-119)。もともとはオスカーに似て、保守的傾向の強いバートラムのはずだが、狡猾さはおじゆずりのようだ。

もちろん連中がおとなしく絵を渡すはずがない。ビニーをとりかえすと同時に絵もうばいかえし、ここからあとは本シリーズ売り物の、ドタバタ追いかけてごっこがはじまる。チボリ公園のはしからはしまでかけまわるクレイジーな鬼ごっこが、目に見えるように描き出される。チボリに行ったことのある、多くのデンマークの子供たちにとって、ここは抱腹絶倒の場面だろう。ふてぶてしいビニーは長期にわたる人質生活もなんのその、男きょうだいに勝るとも劣らぬ活躍ぶりを見せ、犯人を存分に翻弄するのである。絵を取り返し、警察に通報したのもビニーだ (p. 156)。

こうしていつものように骨折り損のくたびれもうけで、事件は終わりを告げる。得をしたとすれば、ビニーだろう。第3巻まで兄弟トリオの取り巻きの一人でしかなかった彼女は、この物語でカルテットの一員の役を、堂々とつかみとったのだ。

6. ABDULAHS JUVELER

第5巻 *Abdulahs juveler* を発表した1981年には、ロイターはすでに25冊の著書を持つ、文句なしの売れっ子作家になっていた。トールキンばりのハイ・ファンタジー *Slusernes kejser*、実験的なジュニア小説 *Skibene i skovene*、半ば大人向けの娯楽作 *Knud, Otto & Carmen Rosita* など、さまざまなジャンルの作品を書き上げたロイターは、ハラハラ4きょうだいの冒険も、ぐんとスケールアップさせた。今回彼等が手掛けるのは、大デパート相手の詐欺事件である。

物語は、父親が勤め先から家族の夏休み資金を借りたことから始まる。今回の彼の仕事は、大デパートの窓拭き係だ。運転手、守衛に続いて窓拭き係。だんだん仕事がきつくなっていくようだ。借金は分割払いで返済するのだが、契約書を丹念に読んだビニーが怒り出す。利息があまりにも高く、返済金の合計が借金の倍近くになるからだ。娘の話を最初に理解したのが母親で、二人は父親の無知さと、社長のあこぎさを責める。女性軍の力はさらに増したようだ。いっぽう男性軍は、迫力がない。何しろ男性軍一のマッちょであるオスカーが、年頃をむかえて色気づき、おしゃれにうつつをぬかしはじめたのだ。毎朝念入りに髪をとき、母親のオーデコロンで口をゆすぎ、石鹸で顔を洗い (p. 6)、着るものはトラボルタもどきの真っ赤なシャツ (p. 14) というていたらく。父親は、座り込んで旅行パンフレットに見入る妻と娘のためにコーヒーをいれる (p. 9)、という具合で、とても第1巻と同じ家族とは思えない。そして母親は怒りを敢然と行動に移す。なんと、社長に復讐するために、ゲオウおじを仲間に引き入れようと言い出したのだ。なんとも無茶な話だが、間が抜けているとはいえ、一族中もっとも犯罪に通暁しているのが彼なのも、たしかだ。母親は家族全員をたじたじさせるほどの迫力で話を決め、きょうだい中たよりになるほうの二人、

すなわちビニーとアナスに、ゲオウを迎えにやらせる。アナスは、今や完全にビニーに牛耳られている。

Hun er dødstreng hende Winni, enten er det fordi jeg somme tider bliver helt gennemsigtig, eller også er det fordi hun har nogle helt specielle øjne. (p. 23)

〈ビニーって、すごくこわい。なんか、自分が透明人間になったような気がするかもしれない。そうでなきゃ、ビニーがスーパー眼力を持っているからかもしれない。〉

母親の迫力を完全に受け継いだモーレッツ少女なのだから、反対しようがないのだろう。

このところ改心中らしいゲオウおじは、空港でツアーコンダクターとなって働き、怪しげな外国語を操って観光客を集めている。ゲオウは、兄一家のほうから力を貸してくれと頼まれ、しかもそれが兄嫁の発案と知って、目を白黒させる。はりきったゲオウは、またろくでもない計略をもちだすが、家族に却下される。家族はすでにオリジナルプランを立てていたのだ。宝石マニアのデパート社長が、中東の小国に伝わる宝石を借りて展示するために、首長を招いたとのニュースを、家族は聞き込んでいた。いたずらで黒く染めた顔の色が抜けなくなったバートラムを首長に化けさせて、大金を手にいれようというのが、主な計画だ。母親が司令官となり、指示を受ける立場になったゲオウは、さまざまな名案を出し、完全犯罪への道は開けたように見えた。母親とビニーとアナスが首長の衣装を縫いあげた (p. 59, p. 67)。家族は図書館でアラブ関係の本を借りまくり、必死で勉強した。

本書における家族の協力ぶりは、今までにもましてめざましい。家事の分担も平等に行われている。ビニーはバートラムと協力しあって朝食後の皿洗いをし (p. 44)、また毛糸の帽子を編んでやり (p. 47)、宝石を見たバートラムは母に持って帰ってやりたいと

考え (p. 51), 作戦実行前のピクニックのために弁当を作るのは, アナスとバートラムと母親の三人であり (p. 69), ピクニック先でビニーとバートラムは仲良く花を摘み, キノコを探すのだ (p. 71). 実にうるわしい家族愛ではないか. スーパーマーケットへ買い物に行くのも, ビニーとオスカーとアナスの三人組で (p. 89), しかもビニーとオスカーは, 品物を吟味して安く良いものを探す名人なのだ (p. 89). 身の回りに気をつかうようになって (p. 47), オスカーの性格は変わったのだろうか. 見事な転身ぶりだ. 今ではビニーとそりが合わないどころか, 彼女の意見を認め, 腕力至上主義者から話し合い重視人間へと変身しつつある (p. 93-95). 昔のような単細胞でなく, 知性すら感じさせる. しかしここまでくると, 彼が飼い慣らされたようで, 一抹の寂しさをおぼえてしまう.

さて, いよいよ作戦開始だ. バートラムはアラブの衣装に身を包み, 通訳役のおじとガードマン役のオスカーを引き連れて, デパートに乗り込む. 父親はそしらぬ顔で出勤し, 窓を拭きながら, ことの成り行きを見届ける役だ. 連絡係はアナス, いざというときのためにビニーと母親はデパートの売り場をうろつく役目. ここで初めて, 母親は名運転手だという, 意外な事実が明らかになる (p. 108). 運転ができるならば, 掃除婦をして腰を痛めなくてもすんだだろうに. 母親とビニーはしごく落ち着いて, デパートの持ち場につく.

作戦は成功し, にせ首長はまんまと大金をせしめる. が, いざずらかろうとしたとき, 今日くるはずのない本物の首長が現れたではないか. ここから後はデパート内で, 例のごとく一大鬼ごっこが始まるわけだ. この鬼ごっこと乱闘で, ビニーの果たす役割は非常に大きい. なんとか弟たちを逃がそうと奮闘し, 積極的に乱闘に加わり, スプリングラーを始動させてデパート中を水びたしにしたのける (p. 136). おじがずっとけたり, バートラムがふざけたりしなければ, 逃亡はずっと速やかに遂行できたはずで, その大部分

がビニーの手柄なのだ。このあと一行は、おじの運転する車でアメリカ映画そこのけのカーチェイスをくりひろげ、奇跡的に逃げおおせる。そして誰ひとり逮捕されもせず、せしめた金で家族はそろってオーストリア旅行に出発する。お話といえはそれまでだが、デンマーク警察もずいぶん甘く見られたものだ。かくして第5作は、はじめて一家の大勝利で、幕を閉じる。

初期の作品にあったメッセージ性は、この作品では完全にふっとんでしまっている。そして家族の女たちの強さはどうだろう。ロイターの私生活で何か大きな変化が訪れたのかと、下世話な詮索をしてしまいそうになる。

7. シリーズ最終作 *DEN SKÆGGEDE DAME*

第6作 *Den skæggede dame* (1989) 発表までには、さらに8年の月日が流れる。大人向けの小説、新聞コラム、映画脚本までも手がけたロイターは、今や超売れっ子の作家であり、毎日5000人のデンマーク人が彼の作品を読んでいる勘定になるという。

なぜこんなに後になって、続編が書かれることになったかはわからない。第6巻は、一家の初めての海外旅行を題材にとってあり、しかも行き先がオーストリアとくれば、第5巻のすぐ後に続くと考えられないのだが、第5巻のエピソードに関しては一切ふれられていない。資金は、父親が長い間苦労して貯めたものだと書いてあるのだ。ロイターは、自分が書いた物語を忘れてしまったのだろうか。またシリーズでは初めて、ミステリーとホラーの手法を持ち込んでいる（必ずしも成功したとはいえないが）。

例によって全体に古典的とも言えるギャグとドタバタがちりばめられた本作は、旅先の話だけあって、家事分担や性別役割についての記述がほとんどみあたらない。したがってこの文章での詳述は割愛する。ただ謎を解こうと頭をひねったり、不気味な隠れ部屋に

踏み込む際に、主導権を握るのはいつもビニーであり、他の兄弟がおびえて尻込みする闇の中にも、一人で入っていこうとする、向こう見ずとでもいい勇気を持ち合わせている (p. 116)。語り手のアナスに、

familiens stærkeste led (p. 79) 〈家族最強のメンバー〉
とまで言わせているのだ。なにしろこの巻のオスカーは、頭髪をつんつんに立てたパンクファッション。ますます身なりに気をつかうようになっている。ここにきてオスカーとビニーの地位は、完全に逆転したといえよう。第1巻から14年たつ間に、女性はそれだけ強くなり、mandschauvinist 予備軍のハラハラトリオの頭の中さえ変えてしまったのかもしれない。

8. おわりに

ジャーネ・ロイターが作家として世に出てから、16年たつ。うち14年という長い年月を、彼と共有しているのが、バートラム・ブックスだ。ロイター25歳から39歳まで——人間の一生でもっとも多くのが起こる時期ではないだろうか。作者が青年から中年への移行期を生き、それにつきあった物語の主人公たちにも——彼等自身の年齢はほとんど変わらないのだが——何ほどかの成長ないしは変化があったようだ。誕生時はかなり保守的な面を持っていて、家事にもあまり参加していなかった父親と3人の兄弟は、作品が後になるにつれ、自然に家事をこなすようになっていく。一方、はじめは影のごとく存在感の薄かった母親と娘が、徐々に力を持ち始め、しまいは家族をリード、いや、ひきずっていくとっていいほどになる。これは作者ロイターの考え（意識とまではいうまい）の変化と同時に、彼を変えさせたデンマーク自体の変化を反映したともいえるだろう。

ロイターは日本流に言えば団塊の世代に属する。この世代の男性

は、底にかなり保守的なものを持っている。自伝的作品を読んでいくと、おそらく彼の育った家庭は、きちんと家事をきりもりする、しっかり者の専業主婦である母親が、牛耳っていたはずだ。かっちりまとまった家庭は、変化を好まない。堅実に育てられた子供たちは、心のどこかに保守の種をひそめているだろう。しかしその種が芽を出すすきを与えないほど、デンマークの、また世界の変わり方は激しかったのかもしれない。

デンマークにおける1988年の統計によると、炊事洗濯掃除といった、いわゆる家事の7割以上は、今なお女性が行っているらしい。皿洗いや食事の後片付け、育児など、男性が参加しやすいと思われるジャンルでも、その6割以上が女性の役割となっている。それに比べればハラハラトリオの育つ家庭は、少なくとも後期の作品では、デンマークの平均家庭並みかそれ以上に家事分担が進んでいるように思われる。

つまり、ハラハラトリオ3兄弟は、mandschauvinist ではないわけで、それは多分、作者ロイター自身がそうでない証拠だろう。別にロイターがmandschauvinist だからといって、筆者は彼のファンをやめるつもりはない。妙な新興宗教にはまりでもしないかぎり、熱心なファンでいつづけたいと思う。だから何なんだ、何のためにだらだらと架空の家族の性役割意識に関する駄文を綴ってきたのかと問われると困るが、とりあえずは、

デンマークの作家チャーネ・ロイターは、男性優越主義者ではなかった。

よかった。

ということで、結論としたい。

Kønsrollemønstre i Bertram-serien

Yuriko Kimura

Resumé

Bjarne Reuter er en af Danmarks mest læste forfattere. Bertram-serien, 6 bøger i alt, er hans første populære serie, og i serien lærer man en fattig familie at kende: far, mor og 4 børn.

Artiklen er om familiens kønsrollemønstre, og den kan resumeres med to sætninger som følgende:

- Er Bjarne Reuter en af de forbandede mandschauvinister?
- Nej, det er han ikke!

Det er jo godt at vide.

参 考 文 献 及 び 資 料

(外国文献の発行地は特記のないかぎり København)

- Nellemann, George. *et al* (red.). 1988. *Dagligliv i Danmark i vor tid*. 1. Nyt Nordisk Forlag Arnold Busck.
- Reuter, Bjarne B. 1975. *Kidnapning*. Branner og Korch.
(木村由利子 訳 1984. 『ハラハラトリオゆうかい作戦』ポプラ社, 東京)
- . 1975. *Rent guld i posen*. Branner og Korch.
(木村由利子 訳 1984. 『ハラハラトリオはちゃめちゃ作戦』ポプラ社, 東京)
- . 1976. *Ridder af skraldespanden*. Branner og Korch.
- . 1977. *Tre engle og fem løver*. Branner og Korch.
(木村由利子 訳 1984. 『ハラハラトリオジェットコースター作戦』ポプラ社, 東京)
- . 1981. *Abdulahs juveler*. Branner og Korch.
- . 1989. *Den skæggede dame*. Branner og Korch.
- Schmidt, Erik Ib. 1990. *Behøver vi at nå det hele?* Spektrum.
- Tuttle, Lisa. 1986. *Encyclopedia of Feminism*. Hallow. Longman.
- Weinreich, Torben. 1988. *Bjarne Reuter*. Branner og Korch.